
学内活動報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 5
P.97-101 (2017)

平成 28 年度第 7 回 FD 研修会報告

Report of the 7th Faculty Development training in 2016

浦川 加代子* 江口 晶子* 小川 典子* 小川 薫*
URAKAWA Kayoko EGUCHI Akiko OGAWA Noriko OGAWA Kaoru
美ノ谷 新子* 近藤 ふさえ* 石井 くみ子*
MINOTANI Shinko KONDO Fusae ISHII Kumiko

要 旨

本学部は平成 25 年度（完成年度）以降、教員の世代交代が進行中で、開設年度と比較すると若い教員が増えている。これまでの FD 研修会では主に教育方法の向上を図る内容であったが、今年度は、「FD マザーマップを活用した FD 課題の検討」をテーマとした。

平成 27 年度千葉大 FD マザーマップが完成したこともあり、午前中は黒田久美子先生（千葉大学大学院看護学研究科附属実践研究指導センター准教授）の講演を聞いて、学部全体で FD マザーマップの要素について理解を深めることにした。また、午後のグループワークでは学部全体の FD ニーズ（課題）を検討することを目的として、第 7 回 FD 研修会を企画した。

索引用語：ファカルティディベロップメント (FD)、FD マザーマップ、FD 研修会
Key words：Faculty Development (FD), FD mother map, FD training

I. はじめに

本学部は平成 25 年度（完成年度）以降、教員の世代交代が進行中で開設年度と比較すると若い教員が増えている。これまでの FD 研修会では主に教育方法の向上を図る内容であったが、平成 27 年度千葉大 FD マザーマップが完成したこともあり、学部全体で FD マザーマップの要素について理解を深めることで、各自の FD 課題を把握するとともに学部全体の FD 課題を明らかにすることが必要と考えた。

そのため、午前中の講演会には黒田久美子先生（千葉大学大学院看護学研究科附属実践研究指導センター准教授）を講師としてお招きすることになった。事前

準備として、各教員のマザーマップ要素の自己分析チェックシート（6 月）を実施して、集計結果を講師とともに分析・検討（7 月）をした。その集計結果を当日の講演内容に含めていただき、午後のグループワークの検討課題につながる研修内容とした。

II. 実施内容

テーマ：「FD マザーマップを活用した FD 課題の検討」
目的：

- ① FD マザーマップを活用し、本学部の FD ニーズ（課題）を体系的に検討する
- ② 教職員間の意見交換を通じて、学びを深めると共に、相互に研鑽・交流する

実施日：2016 年 8 月 4 日（木）10：15～16：00

参加者：本学部教員 34 名 職員 7 名 スポーツ健康

* 順天堂大学保健看護学部

* *Juntendo University Faculty of Health Sciences and Nursing*

(Nov. 11, 2016 原稿受付) (Jan. 20, 2017 原稿受領)

科学部教員 2 名 合計 43 名

研修スケジュール：

- 10：15～10：30 開会のあいさつ（FD 委員長）
学外参加者の自己紹介
- 10：30～12：00 講演「FD マザーマップの活用について」
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター
ケア開発研究部 黒田久美子准教授
（補佐 吉田澄恵特任准教授）
- 12：00～13：00 （昼食）
- 13：00～14：30 グループワーク：
各自の FD 課題と講演内容に基づき本学部における FD 課題を検討
- 14：30～14：45 （休憩）
- 14：45～15：45 全体発表：
6 グループ（7 分発表 3 分意見交換）
- 15：45～15：50 講 評
- 15：50～16：00 コーヒーブレイク アンケート回収 自由解散

III. 実施結果

「看護学教育における FD マザーマップ」は、活用ガイドにあるように個人の能力査定ではなく能力向上に向けた活用が望まれている。そのため研修会前に各教員（33 名）が自分でレベルチェックを実施して集計し、本学部全体で必要な能力が網羅できているのか、組織としてはどのような課題が見いだせるのかを講演内容にも含めていただいた。

講演の中で講師から指摘があったように、「マザーマップに示されている能力すべてを教員が備えることを目指すものではなく」、全体としてどのような傾向

があるのかを把握するために活用してみると、本学部はマザーマップの基本構成要素である「基盤」「教育」「研究」「社会貢献」「運営」において全体的にバランスよく網羅できていたといえる。

特に、教育の要素は強みとなっていることが明らかになった（レベルⅢは教育の平均点が最も高い 1.32）。教育と同程度に基盤の要素も得点が高いことがわかり、本学部の強みといえる。要素によっては、社会貢献の部分は実際にできていても意識していなくてチェックができなかったり、教育では職位によって指導的立場にないためにチェックできない項目もあった。

本学部として充実させていきたい能力を把握するために活用してみると、各グループの検討内容からわかるように、今後の FD 企画に役立つ内容が多く見出された。FD マザーマップの要素別に FD 企画を考案することも可能であるし、まったく枠にとらわれない自主的な FD 研修の在り方も提案され有意義な研修会であったといえる。反省点として、事前の説明不足が指摘された。例えば、各教員のマザーマップ要素の自己分析について、内容がよく理解できないままチェックしたなどの意見があったことから、事前準備において説明の場を設ける工夫が必要であったと思われる。



IV. 今後の FD 課題

グループワークの結果から、以下のような FD 課題が提案された。

① A グループ

- ・おぼろげには見えているが、共通目標としてはなかなか見えにくいのが課題
- ・いろいろな考えをもつ教員がいるが、それでいい。補完し合ってやっていけばいい。
- ・すべてをひとりの教員がやらなくてもいい。
- ・効率よく研究をしたり、教育をしたりする必要がある。
- ・1年目に講義を受けた結果、どうだったかをつなげていく研修会にしていくといい。
- ・トピックとして学ぶことも実は勉強になる。
- ・看護教員は日常的にFDをやっている。これをもっとしっかりと意識して、やっていこう！

② B グループ

- ・基盤：キャリア開発（ワークライフバランス）、健康管理
- ・教育：カリキュラム編成、学生支援
- ・研究：時間のマネジメント、研究者としての人的資源の形成やマネジメント
- ・社会貢献：社会貢献のあり方
- ・運営：リスクマネジメント
- ・様々な経歴を持つ教員がおり、体系化されたFD研修の必要性を感じる。

③ C グループ

「教員が抱えている学生対応上の課題」に焦点をあて、本学部のFD課題について話し合った。学生の傾向や特性などの情報に対する認識や対応方法に、教員間のばらつきがでないようにするため、対応の難しい学生に共通するような傾向や特性について学ぶ機会が必要ではないか。また、配慮の必要な学生の個人情報を共有する際は、その情報をどのように使うのか、どう適切に対応していくのか等の教員間の共通認識を持つことができる体制の検討が必要ではないか。グループダイナミクスを高めるための方法・技術を学ぶことが必要ではないか。

本学部として、何を目指して教育するのか共通認識を図ることが必要ではないか。学生の主体性（主体的に学ぶ姿勢）を高めるには、まず教員の認識を変えていくが必要になるのではないか。

学生の対応上の課題の解決について話し合った結果、学生を変えていくには教員の認識を変えていく必要がある、全教員が同じ方向を向いて学生に対応していくためのFD活動・FD研修が求められていることが確認できた。

④ D グループ

そもそも本学部の教育マインド、「順天堂人」とはどのような人なのだろうか。保健看護学部に求められる教職員像はどのような人物であろうか。それらをどのように共有し、各自が実現していくか。また、職位による役割の相違、例えば教授として学生の教育だけでなく教員の教育、部下の指導の役割がある。組織の考え方が明確でないと教員の役割の標準化につながらないこともある。FDマザーマップの整備は教育観を明確化するのに役立つであろう。マザーマップの一つのテーマを十分吟味、検討することでもFD研修のテーマとなり得る。

⑤ E グループ

- ・職位別、教育歴、教育経験毎のFDがあって良いのではないか。
- ・教員だけでは視野が狭いので、事務職員を含めて学生支援について検討していきたい。
- ・職員間でもっとコミュニケーションが取れたら学生にも反映されていくのではないか。
- ・領域間でも強調すべき教育の視点が異なるので、一概に統一は難しいのではないか。
- ・（教員FD教育の）目に見えて成長が判るラダーのようなものがあっても良いのではないか。可視化できるマザーマップをもっと活用したいと思った。

⑥ F グループ

- ・学内の自主研修会（自由度高い）として、強制では

表 1 所属 (N=33)

保健看護学部教職員	28	84.8%
保健看護学部以外職員	3	9.1%
保健看護学部以外教員	2	6.1%

表 2 開催時期および開催回数

		所属別				
		全体	学部教員	学部職員	学部以外	
開催時期 (N=33)	適当	33	100.0%	28	3	2
	不適当	0	0.0%	0	0	0
開催回数 (N=32)	年 1 回でよい	30	93.8%	26	3	1
	年 2 回がよい ^{※1}	1	3.0%	1	0	0
	その他	1	3.0%	0	0	1

※1 開催回数「年 2 回」の希望開催時期：8 月、2・3 月

表 3 研修内容について

		所属別				
		全体	学部教員	学部職員	学部外	
研修会テーマ (N=33)	関心をもてた	20	60.6%	18	0	2
	どちらとも言えない	13	39.4%	10	3	0
	関心をもてない	0	0.0%	0	0	0
講義内容 (N=32)	関心をもてた	24	72.7%	21	2	1
	どちらとも言えない	7	21.2%	5	1	1
	関心をもてない	1	3.0%	1	0	0
グループワーク 内容 (N=33)	関心をもてた	28	84.8%	23	3	2
	どちらとも言えない	5	15.2%	5	0	0
	関心をもてない	0	0.0%	0	0	0
グループワーク 時間配分 (N=33)	適切であった	30	90.9%	25	3	2
	どちらとも言えない	3	9.1%	3	0	0
	適切でなかった	0	0.0%	0	0	0
全体的な方法 (N=33)	よかった	27	81.8%	22	3	2
	どちらとも言えない	6	18.2%	6	0	0
	よくなかった	0	0.0%	0	0	0

ないFD研修会をやりたい。学部長は入れないで守秘義務、記録なし、座談会風で実施したらどうか。学生への愛情をもっている人たちが集まってコミュニケーションをすることは、学部全体を活性化するのではないか。

- ・他学部との自主研修会として、スポーツ健康科学部、医学部、国際教養など他の教員との交流を実施したらどうか。軽井沢研修施設(セミナーハウス)を利用して、楽しく働いている教員が集まり、様々なテーマで話し合うことで、風通しの良いチームワークがとれる職場環境を整えることにつながる。

V. アンケート結果

FD研修会参加者43名のうち、アンケートを回収できたのは33名であった(回収率76.7%)。集計結果をみると講演内容は、7割以上の参加者が関心をもてたと回答していた。グループワークで「日頃話せない教員と話す機会になった」「楽しかった」という自由記載回答があり、講演を聞いた後に他の参加者とディスカッションする現在の研修会の形式は、概ね好評であると考えられる。

一方で、少数の自由記載回答には、「一日の研修が長い」「半日でも良い」という意見があったので、研修会の形式については今後検討してみることも良いと思われる。

VI. おわりに

大学全体でFD研修会の実施結果が、どのように教育や研究に還元されているのかを問われている。本学部のFD担当者としても、毎年FD研修会を実施しているだけでは、本学部が何を目指しどのような方向性を有しているのを明確にできないと感じていた。その疑問を土台に、今年度FD委員会では千葉大学が開発したFDマザーマップを活用し、本学部のFDニーズ(課題)を検討することに取り組んだ。

グループワークの結果から、「これまでのFD研修会がトピック的で継続性がなかった」ことを指摘する意見があり、さらに「体系化されたFD研修の必要性を感じている」教員もいたことから、今後のFD研修会は、実施の結果を活かしていくためのプログラム構築が必要である。

例えば、マザーマップを活用してレベルのステップアップを図る内容であれば、可視化も可能である。Cグループから提案のあった教育要素の中でも「学生対応のスキルを高める」内容に焦点を当てることは、教員の教育実践能力の向上につながるであろう。本学部は「基盤」「教育」の要素が強みであることから、「教育」の中でも「学生支援(対応)」「実習指導能力」「授業運営能力」などに焦点を当てた内容を検討することも可能である。

グループワークの結果には、「職位別、教育歴、教育経験毎のFDがあつて良い」という意見があり、全体研修の方法だけでなく、FDマザーマップの基本構成要素である「基盤」「教育」「研究」「社会貢献」「運営」別の研修内容を企画する研修会も考えられる。さらに発展して、Fグループから提案のあった「自主的なFD研修会」が適宜実施できるような活性化された学部に賛同する教員も複数存在している。

このように研修会の在り方を今後のFD委員会で検討しながら、今年度の研修内容である千葉大FDマザーマップの基本構成要素についてさらに吟味を加え、企画内容に活用していくことも一つのやり方である。今後、研修会の実施結果が確実に教員の能力向上につながっていくようなFDプログラムを構築して実施する必要がある。